

「見ること」の意味 『スイミー』試論

The Meaning of “to See” :
An Essay on *Swimmy*

稲葉 昭一
Shoichi INABA

はじめに

2010年で生誕100年となる芸術家、グラフィック・デザイナー、絵本作家のレオ・レオニ (Leo Lionni, 1910~1999)。アメリカ、イタリアを拠点に⁽¹⁾ 多くの絵本を世に残し、日本でも多くの絵本が翻訳されているが、意外にも絵本を書き始めたのは、49歳のころであった。それは、芸術家・イラストレーターとして前線で活躍してから、20年以上も経った後なのである。それでも、遅くに始めた絵本創作は、その後天寿を全うするまで続くほど彼の主な活動になり、生涯で28冊もの絵本を残すこととなった。芸術家らしく、画材・技術はさまざまで、水彩・油彩・色鉛筆・クレヨンを使った絵のままもあれば、コラージュの技法を取り入れたものもあった。

その中でも、最も人気のある作品と言っても過言ではない、『スイミー』 (*Swimmy*, 1963) を今回取り上げてみる。技術的に見れば、ゴム印で押されたたくさんの赤い魚たちと、手描きで描かれた主人公の黒いスイミーが特徴的である。また、海の世界が様々な技法で表されて、絵だけでも忘れられない本である。日本では、谷川俊太郎によって訳されている絵本⁽²⁾ であるが、国語の教科書にも長年使用されており⁽³⁾、日本の子どもたちにもなじみ深い作品である。また、作者レオ・レオニ自身にも、子どもの本として特別な作品と言われている。レオニは自叙伝『世界とせかいとセカイ』 (*Between Worlds*, 1997)⁽⁴⁾ で以下のように述べている。

And now, with a slightly mysterious cover, low key in color and composition, here was *Swimmy*, my first real fable, which in no time became the role model for most of the books that were to follow. It contains all the principles that have guided my feelings, my hands, and my mind through my long career as a children's book author. (231)

(そして、ここに今、少しなぞめいた感じの表紙で、色使いと構成が控えめな、絵本『スイミー』が登場する。私が最初に書いた真の寓話であり、すぐ後に続く自作の模範的作品になるのだった。つまり、この本は、子どもの本の作家としての長い作家人生を通じて、私の感情や手法、そして思想を導いてゆくすべての原理・原則を備え

ているのだった。)

というように、作者にとっても、『スイミー』は「真の寓話」であり、「子どもの本の作家としての」「私の感情や手法、そして思想を導いてゆく」「原理・原則を備え」たという特別な作品だった。さらに、作者はその後の変化についても語っている。

For the first time in all my work, I found myself confronting a tangible audience. Along with the fan mail came invitations from schools, and these awakened in me a need and a desire to understand my audience. ...I became ever more conscious of the problems children face and the importance of the messages we send to them. It is often said - and I think somewhat too easily - that to write for children you must be the child, but the opposite is true. In writing for children you must step away and look at the child from the perspective of an adult. (234)

(それまでのどの作品にもなかったことだが、初めて私は『スイミー』によって、手で触れて感じるような読者を目の前にしていることに気づいた。ファンレターに加えて、学校からの招待状が来るようになり、私の中に読者を理解したい、しなければならぬという思いが芽生え始めた。…(中略)…また、子どもたちが直面する問題や、作家が子どもたちに送るメッセージの重要性を今まで以上に意識するようになった。よく言われることで、いささか不用意に言われる嫌いがあると思うのだが、子どものための作品を書くためには、子どもにならなくてはならないのだが、事態はその反対である。子どもの本を書くときは、子どもから一步離れ、大人の視点から子どもを見なければならぬのである。)

絵本論という以上に、どのように子どもを育てるかといった教育論にもとれる良い文章である。このように、世界中の読者を魅了し、日本では小学校2年生用の教科書としても使われていて、かつまた、作者自らの意識を変えて、「導いてゆく原理・原則」を持つ『スイミー』とは、どんな作品なのだろうか。前述の自叙伝『世界とせかいとセカイ』を中心に、作者の考えをひも解きながら、この作品を考察していきたい。また、実際この原書絵本を読む者の反応として、現在の日本の小学校6年生の児童たちが、この原書絵本をどのように読み、どのような感想を持つのかも、アンケートを実施してまとめ、別の角度からも作品論を試みることにする。

『スイミー』熟読

ここでは、原点に立ち返るように、原文をしっかりと読み取って、拙訳を試みている。実際は、以下の文章とともに絵が付いているのであるが、ここでは文章に焦点をしばり、特に文章から読みとる『スイミー』論を強調していきたい。

A happy school of little fish lived in a corner of the sea somewhere.

They were all red. Only one of them was as black as a mussel shell.

He swam faster than his brothers and sisters. His name was Swimmy. (1-2)

小さな魚たちの楽しい一団が、海のどこか、隅っこにいました。
みんな赤い色で、一匹だけが、ムール貝のように黒いのでした。
その魚は兄さん姉さんよりも速く泳ぎ、名前はスイミーと言いました。

One bad day a tuna fish, swift, fierce and very hungry, came darting through the waves. In one gulp he swallowed all the little red fish.

Only Swimmy escaped. (3-4)

ある悪い日に、すばしっこくて、恐ろしく、とても腹をすかしたマグロが、
波をぬって突進して来ました。マグロは、ひと飲みですべての赤い小魚たちを飲み
込んでしまい、スイミーだけが逃げたのでした。

He swam away in the deep wet world. He was scared, lonely and very sad. (5-6)

深くじめっとした暗い世界へと逃げていきました。怖くて、一人ぼっちで、とても
悲しくなりました。

But the sea was full of wonderful creatures, and as he swam from marvel to marvel Swimmy was happy again.

しかし、海にはたくさんの素敵な生き物たちがいて、つぎつぎにビックリするもの
を目にしなが、あちこち泳いでいくうちに、スイミーはまた、元気になりました。

He saw a medusa made of rainbow jelly... (7-8)

虹のゼリーでできたクラゲを見て・・・

a lobster, who walked about like a water-moving machine... (9-10)

ロブスターにも会って、水中自動車のようになっているのを見て・・・

strange fish, pulled by an invisible thread... (11-12)

見知らぬ魚にも会って、目に見えない糸に操られているのを見て・・・

a forest of seaweeds growing from sugar-candy rocks... (13-14)

海草の森が氷砂糖のような岩から生えているのを見て・・・

an eel whose tail was almost too far away to remember... (15-16)

うなぎにも会って、尾っぽが意識が遠のくくらい遥か彼方まで伸びるのを見て・・・

and sea anemones, who looked like pink palm trees swaying in the wind. (17-18)

イソギンチャクにも会って、ピンクのやしの木々が風に揺れているように見えまし
た。

Then, hidden in the dark shade of rocks and weeds, he saw a school of little fish, just like his own.

“Let’s go and swim and play SEE things!” he said happily.

“We can’t,” said the little red fish. “The big fish will eat us all.”

“But you can’t just lie there,” said Swimmy. “We must THINK of something.” (19-20)

そうして、岩と海草の影に隠れたときに、スイミーは小さな魚たちの一団を見つけ

ました。自分とそっくりの小さな魚たちでした。

「さあ、泳ぎに行つて、何でも見ちゃうごっこをしよう！」彼はうれしそうに言いました。

「できないよ」小さな赤い魚は言いました。「だって、大きな魚が私たちをみんな食べちゃうもの」

「でも、そこにただいたってダメだよ」スイミーは言いました。「ぼくらは何かを思いつかないとね」

Swimmy thought and thought and thought.

Then suddenly he said, "I have it!"

"We are going to swim all together like the biggest fish in the sea!" (21-22)

スイミーは考えて、考えて、考えました。

すると、突然彼は言うのでした。「うん、これだ！」

「みんなで一緒に泳ぐんだ。この海で一番大きな魚のようにね！」

He taught them to swim close together, each in his own place, (23-24)

一緒にくっついて泳ぐことを伝えました。みんなが自分の場所で泳ぐのです。

and when they had learned to swim like one giant fish, he said, "I'll be the eye." (25-26)

そして、小魚たちが一匹の大魚のように泳ぐのをおぼえると、スイミーは言いました。「ぼくが目になるよ」

And so they swam in the cool morning water and in the midday sun and chased the big fish away. (27-28)⁽⁵⁾

そうして、みんなはずすしい朝の水の中を泳いで、昼間の太陽のもとでも泳いで、大きな魚を追い払ったりするのでした。

数年前に作られた長編アニメーション映画『ファインディング・ニモ』(*Finding Nemo*, 2003)を思い出したりもする。しかし、映画は、父親が息子ニモを仲間と一緒に騒ぎながら探すのに対し、絵本は、主人公スイミーがまったくの一人ぼっちになってしまい、悲しみにくれながらも、旅をして、不思議な生き物たちと出会う流れになり、かなり違った作品となっている。さらに、他の生き物とコミュニケーションをとるといよりも、むしろ静かに見て、考えるという点も映画には無い違いであった。児童文学者、編集者の松井直氏はこの部分を以下のように、「作者が最も語り伝えなかった」⁽⁶⁾ところ、と述べている。

スイミーはもともとから海の中で暮らしていたにもかかわらず、ひとりぼっちになるまでは、自分の生活の場である海という世界がどういうところか、その世界のなかで自分がどういう存在であるのかも、気づいてはいなかったのです。現代の私たちも、このスイミーと同じではないでしょうか。スイミーはひとりぼっちになってはじめて、海という世界がどうなっているのかを自分の眼で観察し、どんなに珍しくおもしろいものが生きているのか、またどんなに美しい世界なのかに気づき、そのなかで自分とい

う存在そのものに気づいてゆきます。つまり自分とは何かを意識し、自己認識を深めてゆきます。孤独も自分を見いだす一つの手がかりなのです。(109)

「孤独」になるという経験は、「かわいい子には旅をさせろ」というように、そのときは(あるいは、最初は)悲しく、辛い時間になるが、その経験を味わうことで、周りのことに気づき、自らも知るといことなのである。この点は、作者レオニもまた、「孤独」とははっきりと述べていないが、あるインタビューの中で答えている。(7)

『スイミー』に話をもどすと、兄さんや姉さんはマグロにのみこまれてしまうけれど、スイミーはその惨事の中でも生きのこります。苦しんだが故に、スイミーはじょじょに人生の美しさに気がつくようになります。このところは私にとっては、とても重要なことなのです。スイミーをはじめは淋しがっていますが、やがて人生を詩的なものとしてながめるようになったことから、生命力と熱意をとりもどし、ついには岩かげにかくれていた小さな魚の群れを見つけだします。(45)

読者は、その後、スイミーが「うん、これだ!」と言って、仲間の赤い魚たちに泳ぎを教えて、「ぼくが目になるよ」と言う場面に大いに感動する。しかし、読者がそのように感動できるのは、松井氏や作者自身が述べているように、その場面の前でスイミーが「孤独」で「苦しんだ」経験を味わったからなのである。絵は、その部分に6場面もの見開き頁(7頁から18頁)で描かれており、ここに作者が強い気持ちを込めていることが窺われるし、文章でも、その場面には英語の動詞は saw しか、スイミーの行動を表すものはないが、この saw によって、19、20頁の SEE につながり、さらにTHINK に結びつき、thought を続け、「うん、これだ!」となるのであった。

では、なぜ、作者は、大文字のSEE、THINKにしたのだろうか。次の章で、この疑問の答えを探り、作者の『スイミー』への思いに触れてみたい。

作者の思い

およそ300語、15枚の絵からなるこの絵本が出版社から出来上がってきたとき、作者レオ・レオニは以下のように感動を持って迎えたと言う。

Probably one of the most important events of 1963 was the arrival of the first copy of *Swimmy*, my fourth children's book. When I began unwrapping the package, my hands were so shaky that Nora took the package and scissors I was brandishing, and in no time at all produced what in a single glance I recognized as my best book to date. I placed it with my three others, side by side against the wall, dragged the armchair to the center of the studio, and sat down. (231)

(おそらくは、1963年の出来事の中で最も重要なものは、『スイミー』の初版が届いたことであろう。私の子ども向けの本としては、四つ目の作品である。(8) 梱包された

絵本の包を開けようとしたが、手があまりにも震えてしまい、見かねた妻のノーラが「私が開けるから」とその包を受け取り、私の覚束ない手に握られていたハサミも取り上げると、あっと言う間に中身を出して見せた。一目見て、それまでの自分の最高作品だと分かった。私は、その本をそれまでの三冊の子ども向けの本と一緒に並べた。表紙が見えるようにして壁に立てかけて。そして、肘掛イスを仕事部屋の真ん中に引っ張っていき、わたしは腰を下ろした。）

感動とともに、作者はこの本を「それまでの自分の最高作品」と言い切っている。これは、序論で紹介したように、「スイミー」が「真の寓話」で、作家を「導いてくれる原理・原則を備え」という特別な作品だからである。しかし、この点をここで明らかにする必要はある。つまり、作者の述べる「原理・原則」とは一体何を意味しているのだろうか。その点について、作者は力強く、丁寧に以下のように述べている。

Swimmy was the book that for the first time led me to consider the making of books as, if not my main activity, one that was no less important than my painting and my newly discovered sculpture. ...The ethics of art not only as a pleasurable but as a useful activity was clearly the moving force in the book. The central moment is not so much Swimmy's idea of a large fish composed out of lots of tiny fish but his decision, forcefully stated, that "I will be the eye." Anyone who knew of my search for the social justification for making Art, for becoming or being an artist, would immediately have grasped what motivated Swimmy, the first embodiment of my alter ego, to tell his scared little friends to swim together like one big fish. "Each in his own place," Swimmy says, suddenly conscious of the ethical implications of his own place in the crowd. He had seen the image of the large fish in his mind. That was the gift he had received: to see. (232)

（『スイミー』こそ、本作りの大切さを初めて考えさせてくれた作品であった。本作りが私の中心的活動という意味合いではなく、絵画や新たに見出した彫刻制作と負けず劣らずの重要性があることを理解させたのであった。...（中略）...ひとを楽しませる活動としてだけでなく、何かの役に立つ活動としての芸術がもつ倫理（進むべき道）こそ、『スイミー』おける、動的な力である。核心となった瞬間は、スイミーがたくさんの小さな魚たちで大きな魚を作ろうと思ったことではなく、彼の決心であり、力強く「ぼくが目になるよ」と言ったことなのである。芸術を作り出すことの社会的正当性や、芸術家になること、あるいは芸術家であることの社会的正当性を、私がずっと模索してきたことを知る人であれば、だれであれ、スイミー もう一人の「私」の分身第一号であるが を衝き動かし、おびえる小さな友だちに向かって《大きな魚になって一緒に泳ごう》と言わせるものが何であるのかが、たちどころに分かるだろう。「それぞれが自分の場所で」とスイミーは、突如、群集の中のみずからの倫理的な意味合いに気づいて、言うのである。スイミーの頭の中には既に大きな魚のイメージが思い描かれていたのだった。それこそがスイミーの天から与えられた才能である。つまり、見ることである。）

作者は、「スイミー」において、心に思うことではなく、仲間を「動かし」自ら「動いたこと」が芸術の倫理（進むべき道）と言い、「核心となった瞬間」が、「彼の決心」、スイミーが「ぼくが目になるよ」と言ったことだと明言している。そして、「大きな魚になって一緒に泳ごう」、さらには大局観までも得た「それぞれが自分の場所で」と言わせたのが何かを、作者の活動を認識する人には理解できると言っている。つまり、「見ること」を、作者の分身であるスイミーが手に入れたことで、そこから自分を決心させ、仲間提案できたというのである。なぜならば、作者も芸術家として、「社会的正当性を模索しながら」、「見ること」を通して何が自分にできるか、何を他の人々に伝えるかを思い、社会に作品・言葉を表現しているからなのであった。

ここで作者が言う「見ること」とは、人々がなかなか気づけないこと、乗り越えられないことに対して、まずは、熱心に、「見ること」であり、かつ、そうすることで大事な何かを与えてくれるような、先の世界を「見ること」「見えること」である。作者は、そのことをスイミーになって「ぼくが目になるよ」と信念を持って、象徴的に伝えているのである。まさしく、この「見ること」が「作者の感情、手法、思想」を導いた「原理・原則」なのである。

だからこそ、19、20頁には、SEEという大文字で綴り、強調された語があるのであった。しかし、ただ見るだけでは、「ぼくが目になるよ」にはたどり着けない。それゆえ、THINKも大文字で強調されているのである。作者は「見ること」とともに「考えること」が、人々を先の世界の見通しを与え、正しい決心へと導いてくれるもの、ということを強調しながら表現しているのであった。

小学生の感想

ここでは、実際の読者が原書絵本「スイミー」をどのように読むのかに焦点をあて、この作品を知る手がかりを得ていきたい。

今回は、筆者の地元にある、東京都東村山市立東萩山小学校の6年生の児童81名を対象に、アンケート調査を行った。手順としては、1. 筆者からの、英語による絵本の読み聞かせ 2. 2年次に読んだ教科書「スイミー」のコピー配布。内容確認。3. 3,4人に1冊の割合で、原書絵本「スイミー」のコピー配布。質疑応答を含む各自の読み。4. アンケート実施。

アンケート内容は、以下の通りであり、結果とともに記述する。

1. おもしろかったですか？

とてもおもしろい	43名	おもしろい	29名	ふつう	8名
あまりおもしろくない	1名	おもしろくない	0名		

<おもしろい以上の意見>

- ・自分たちで読んでみて、読めたときうれしかった。
- ・英語でわからないけれど、想像して考えるところがおもしろい。
- ・暗号をかいどくするみたいでおもしろい。(英語と日本語が一致する発見)
- ・赤い魚たちは大きな魚のふりをして、スイミーが目になったシーン。
- ・日本語で読むのとは全然違っておもしろかった。
- ・英語の発音がおもしろい。
- ・本が好きなので、本を読みながら英語を学べるのは楽しい。
- ・英語の「スイミー」はくわしく書いてある分、長くておもしろかった。
- ・英語版と日本語版を比べられたこと。(少し違っておもしろい)

<ふつう以下の意見>

- ・英語がむずかしい。
- ・苦手だからむずかしい。
- ・いきなり合体とかで、英語だからわからなかった。

2. わかりやすかったですか？

とてもわかりやすい	28名	わかりやすい	36名	ふつう	15名
あまりわかりやすくない	1名	わかりやすくない	0名	無回答	1名

<わかりやすい以上の意見>

- ・英語だと表現が複雑じゃないので良かった。
- ・わかりにくかったけれど、知ってる英語も出てきたからわかった。
- ・絵を見ながらだから、まあまあわかった。
- ・内容などが簡単でわかりやすい。
- ・「スイミー」はみんなが知っている話だから。
- ・日本語の本(教科書)と一緒に読めたから、内容がつかみやすい。
- ・英語版の「スイミー」はくわしく書いていて、とてもわかりやすかった。

<ふつう以下の意見>

- ・英語はまだ習ってないから、ほとんど読めなかった。
- ・英語は少ししかわからなかった。
- ・通訳みたいのがほしかった。

3. 日本語のもの（2年生のときの教科書）とくらべて、日本語・英語のちがいのほかに、ちがいを感しましたか？

とてもちがった 26名 ちがった 43名 ふつう 5名
あまりちがっていない 6名 ちがっていない 1名

<ちがった以上の意見>

- ・英語版の文字が多かった。
- ・英文の長さが長い。
- ・意味がちがう気がした。
- ・英語だととにかく感じ方がちがう。
- ・絵の向きが逆だった。
- ・作者が何を大切にしているかが英語だとわかるところ。
- ・SEEにしている作者の心は、英文じゃないとわからないから。
- ・教科書は絵をだいぶはぶいていたりしている。
- ・絵本は描写が細かい。
- ・英語の方が、表現にとてもインパクトがあった。
- ・兄弟のいるところを「スクール」とっていたから。
- ・2年生のときよりスイミーの気持ちがわかるようになっていた。

<ふつう以下の意見>

- ・絵もほぼ同じだったし、英語版でも、大体話がわかったから。
- ・見てほとんど同じに感じた。
- ・内容的には同じだけれど、英語だと印象が違う。

4. 英語の絵本は、たくさんありますが、読んでみたいと思いますか？

とても読んでみたい 19名 読んでみたい 35名 ふつう 14名
あまり読んでみたくない 5名 読んでみたくない 1名 無回答 7名

<読みたい英語の絵本>

- ・絵本じゃないけれど、「ハリー・ポッター」。
- ・「エルマーの冒険」
- ・英語の絵本なら何でもオーケー。
- ・「やまなし」の英語版があれば。
- ・「はらぺこあおむし」
- ・ディズニーもの。

東萩山小学校の6年生は、非常に反応がよく、円滑に事が進んでいった。担任の先生方に伺うと、低学年次から（日本語の）絵本の読み聞かせを始めているので、今回のやり方もスムーズに受けられたのではないかとのことである。アンケート調査結果も、ほとんどが前向きな意見であり、「おもしろかった」は88.8%、「わかりやすかった」79.0%、「英語絵本を読んでみたい」66.7%となり、それぞれの意見も丁寧に書かれていて、興味深いものである。

そして、「教科書と絵本は違う」と答えた児童は、85.1%もいた。教科書が、日本語版のダイジェスト版であるのに、子どもたちの目には違うように見えるのだった。「日本語・英語のちがいのほかに」と注を付けたが、6年生にとっては、その影響は大きく、英文による変化を感じた児童はやはり多かった。だが、それだけではなくて、絵本の方が「表現にインパクトがあって」「作者が何を大切にしているか」を感じとろうとしている子や「SEEにしている作者の心」を考える子が出てくるのであった。つまり、教科書版、日本語版では表せなかった、6場面もの見開き頁（7-18）の表現を絵とともに味わうことによって、同様に教科書版、日本語版では表せなかった、英語のsawからSEEの変化を感じとろうとしているのである。この事実こそが、「原理・原則を備えた」絵本『スイミー』の素晴らしさといえるもので、作者の想いが読者に届いている証なのであった。

さいごに

絵本『スイミー』（*Swimmy*）は、一人ぼっちになったスイミーが、苦勞を経験して「見ること」、「先を見通すこと」を手に入れて、活躍する物語である。「見ること」は、作者レオ・レオニを以後子どもの本作家へと突き進ませる「原理・原則」たるものであり、『スイミー』を作り上げる原動力となっている。

「苦勞」には、孤独があり、ひとり淋しい経験であるが、そのときに周囲をしっかりと見渡し、自らの内面も見つめることのできる、いい時間にもなれるものであった。その経験があったからこそ、「みんなで一緒に泳ぐんだ。この海で一番大きな魚のようにね！」の後、「ぼくが目になるよ」と確固たる気持ちで、スイミーが言えるクライマックスを迎えるのである。

他の絵本作品を振り返ってみると、有名な作品がこの「原理」を踏まえていると言える。モーリス・センダック（Maurice Sendak, 1928～）の『かいじゅうたちのいるところ』（*Where the Wild Things Are*, 1963）や、エリック・カール（Eric Carl, 1929～）の『はらぺこあおむし』（*The Very Hungry Caterpillar*, 1969）がそうである。前者は、少年が夢の中で怪獣たちと遊び、大騒ぎをしたその後に孤独感を味わい、後者は、青虫が、実際にいろいろな種類の食べ物を月曜から金曜日まで食べ続けてしまい、その後の苦しみを体験するのだった。そして、その「苦勞」を一人で経験して、「見ること」を経て、自らの進む道を発見し、成長していくところは、内容の違いはあるとはいえ、まさに、スイミーの辿ってきた道と同じなのであった。

そして、読者も十分にこの作品を楽しんでいる。今回は小学校6年生という、英語を習い始めた読者へのアンケートであったが、その若い読者たちにとっても、おもしろく、わ

かりやすいと感じられる作品なのであった。かつ、教科書との違いも感じ取り、「描写の細かさ」や大文字で書かれたSEEに気づき、「見ること」の重要性を認識する児童もいて、この作品の良さを改めて知らせてもらうのである。

このように、絵本『スイミー』の「見ること」は、他の絵本作品にも広がっていて、読者にも伝わる「原理」なのであった。スイミーは言う。「何でも見ちゃうごっこ」をしよう、と。苦労したり、孤独になることは大変だが、その時に一人でよく「考えて」、周りも自分も見つめていくと、自分の居場所がわかったりして、「見えること」「先を見通すこと」ができるよ、と。そうして、読者に人生をより豊かに過ごせるヒントを与えてくれているのだった。

注

- (1) Leo Lionni (1910~1999) オランダのアムステルダム生まれ。一時、アメリカに住むも、その後イタリアに移住。大学卒業後、グラフィック・デザイナーとしてスタート。ユダヤ人であることで、アメリカに亡命。アメリカでも、活躍した。
- (2) 谷川俊太郎訳『スイミー』は、日本で、次の年1964年に出版された。
- (3) 小学校2年生の教科書『小学校こくご たんぼぼ』、二(上)は、谷川俊太郎訳『スイミー』日本語版を5頁に縮小したものを使用している。
- (4) Leo Lionni, *Between World*. New York: Alfred A. Knopf, 1997. 日本語には翻訳されておらず、題名も含め、英文の下に記載したものはすべて拙訳。
- (5) Leo Lionni, *Swimmy*. New York: Alfred A. Knopf, 1963. アメリカ図書館協会創設の絵本賞であるコールデコット賞受賞。英文の下に記載したものはすべて拙訳。尚、原書には頁が付いていないが、今回論を進めるにあたって都合がよいと考え、()内に記した。
- (6) 松井直、『絵本のよろこび』、日本放送出版協会、2003年。
- (7) レオ・レオニ、掛川恭子訳、“一九三六年ミラノから”、『子どもの館』、1976年、6月号。
- (8) *Swimmy* (1963) の前に、*Little Blue and Little Yellow* (1959), *Inch by Inch* (1960), *On my Beach Are Many Pebbles* (1961) を出している。

参考文献

- Carl, Eric. *The Very Hungry Caterpillar*. New York: Philomel Books, 1969.
- Sendak, Maurice. *Where the Wild Things Are*. New York: Harper & Row, 1963.
- Silvey, Anita, ed. *The Essential Guide to Children's Books and Their Creators*. New York: Houghton Mifflin, 2002.
- Silvey, Anita, ed. *Children's Books and Their Creators*. New York: Houghton Mifflin Company, 1995.

- Stanton Jr., Andrew C. and Unkrich, Lee. *Finding Nemo*. California: Pixar Animation Studios, 2003.
- 鳥越信編著、『絵本の歴史をつくった20人』、創元社、1993年。
- レオ・レオニ、谷川俊太郎訳、『スイミー』、好学社、1964年。
- レオ・レオニ、谷川俊太郎訳、『スイミー』、『小学校こくご たんぽぽ』、二（上）光村図書、2009年。
- 吉田新一編著、『ジャンル・テーマ別 英米児童文学』、中教出版、1987年。